

「自信教人信」とは

私は前号で、信仰とは「信心」、つまり自分の心を信じることだと述べた。信仰とは自らに自信を持つことであり、自尊心と誇りが不可欠である。現代の多くの宗教教団がいずれも伸び悩んでいるのは、とくに代を重ねた信者たちにとって、信仰に自尊心や誇りが感じられなくなったからである。信仰はお仕着せの服ようになり、精神は弛緩して覇気を失い、生活慣習や年中行事に埋没しがちである。

これが数百年も続いてすっかり宿痾のようになってしまったのが伝統仏教教団だとすれば、ここ数十年あるいは十数年のこの急性疾患にどう対処して良いか分からず、おろおろしているのが新宗教教団である。それゆえ、新宗教は、良きにつけ悪きにつけ伝統宗教の歴史に学ぶべきであろう。

国家の体制側に組み込まれ、また自ら内なる体制を築きあげている伝統教団であっても、その出発点は本来、革新的なものだった。私は、浄土真宗における宗祖・親鸞(1173-1262)と中興の祖・蓮如(1415-1499)とを手掛かりに考えてみたい。前者が真摯な求道の信仰者なのに対し、後者は偉大な職業的宗教家だとはよく言われるが、実際そうであるにせよ、もう少し詳しい説明が必要だ。

浄土宗門に「自信教人信」という言葉がある。ここでいう「自信」は「自分が信仰する」ということであるが、私には「自己を信頼する」という意味の「自信」にだぶって理解されてくる。自分に真の自信があつてこそ、信仰は他者にも伝わるものだ。してみると、「教人信」のほうも、「人にも教えて信じさせる」というよりは、自らの自信のほどが感化を与え、「人にも自信を持つように教える」というふうにも読めるのである。この「自信教人信」に文字通り体当たりした求道の信仰者が親鸞なのに対し、すでに敷かれた「自信教人信」の路線を職業的宗教人として自らの使命と受け取ったのが蓮如だった。

親鸞と蓮如—その生命力の発露

親鸞は90歳、蓮如は85歳まで生き、どちらも当時としては驚異的な長命を保った。そこにはきわめて強い「生きんとする意志」があつたことを物語る。この「生きんとする意志」は、彼岸的な浄土信仰とは異質なものであり、生すなわち性のエネルギーでもある。親鸞は、自らが求める信仰に徹しえないという苦悩と葛藤を常に抱えていた。彼は、出家の道を志し修行を続ける中、生身の人間として性の煩惱に懊悩し、六角堂参籠の折の夢告を経て、僧籍にある者には本来許されない女犯=妻帯をついに敢行する。煩惱熾盛なるがゆえに、それを突破せんとする生命力(エネルギー)もまた巨大なものだった。しかも後年になつても、「愛欲の大海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず」(『教行信証』)と、親鸞の胸の中はたえず懺悔の念に慟哭している。

これに対して、真宗の教えはすでに確立してははや肉食妻帯のタブーも存在せず、正しきに則れば何のやましいことはない、こう考えて実際その通りに実行したのが同宗本願寺八世である蓮如である。彼にとっての焦眉の急は教団組織に揺るがぬ支えを与えることだ。そして、そのために心底信頼できる人間は自

分の血を分けた息子や娘たち以外にありえない。彼は結局、5夫人を迎え、27人の子女をもうけた(70を過ぎてめとつた最後の夫人は20歳そこそこ、最後の子は85歳で没する死の前年に生まれた)。これまた大きな生=性のエネルギーであるが、彼は自らの子女を次々と主要な寺院におくりだし、本願寺教団の橋頭堡となしたのである。

一方、親鸞は専修念仏停止の法難により、越後に流された後は、痛恨の自覚を込めて愚禿を姓とし、自らは僧にあらず俗にあらず(非僧非俗)を宣言するにいたつた。他方、蓮如は同じ非僧非俗でありながら、生まれながらの宗教人としてもはや葛藤も緊張も感じることなく、偉大な家父長的組織者としてふるまつた。彼は徹底した血統信仰に立ち、法脈は男系の血脈によってこそ受け継がれなければならないと信じた。同朋主義は寺と門徒との関係にのみあつて、一門一家の安泰はどこまでも血縁の原理で行く。そこに、家父長であり法主である者の揺るぎない決意がある。山折哲雄は、その古典的名著『人間蓮如』(春秋社[初版]、洋泉社[増補新版])の中で、こうしたやり方によって教団の盤石な基礎が築かれたと同時に、その動脈硬化と退嬰の原因をも作り出してしまったと指摘している。自らも同じ真宗僧侶の子として生まれただけに、自己批判をも込めた山折氏の筆鋒は肺腑をつくものがある。

新たな非僧非俗への期待

親鸞の場合、非僧非俗とは彼が体当たりで問題提起して得た結論である。これに対して、蓮如の非僧非俗は屈託のない報恩三昧の境地である。これは親鸞の非僧非俗をいわば反転させ、非僧はより世俗的に、非俗はより宗教的にふるまうという意味において非僧非俗となつたものである。

今、教勢低迷に悩む教団関係者の間で蓮如に学ぶことが流行しているが、むしろ蓮如に対しては山折氏の批判をこそ差し向けるべきである。蓮如の教団組織モデルは主要幹部を身内で固めた組織のそれであつて、これこそ教団を自閉の共同体にさせて士気を低下させる元凶であり、主体的な個人信仰を窒息させてしまう低^{てい}の^いものだからである。

それゆえに、今日期待すべきは、蓮如のような偉大な組織人の出現ではもはやない。むしろ一人一人の信仰者が、親鸞を仰ぎつつ「自信教人信」を貫き、非僧非俗を蓮如型からさらに反転させていくことではないか。幸いなことに浄土真宗には妙好人という篤信者の伝統がある。実は、妙好人こそが親鸞や蓮如を精神的に經由して到達した、一種の自由自在で^{とら}われなき境地に生きる人々なのである。

現代にも妙好人は少なからず存在している。その中のある人たちは社会の難渋にかかわる妙好人である。僧籍を持っている者もいるが、決して職業的宗教者ではなく、困窮した人々に寄り添い、人知れず支援を行っている。最近、大阪釜ヶ崎で活動している宗教ボランティアの人々の中で、そうした妙好人と知り合うことができ、私はあらためて真宗の底力を知ることになった。どのような教団においても例外ではない。こうした妙好人が多数輩出してくることこそ、真の意味での教団活性化につながると思うのである。